

戯文ニ真理アリ in *Ludo veritas*

——キルケゴールから吉田健一「金沢」へ、堀田善衛を經由して

上田 高弘

誤植の経緯

長谷川郁夫による評伝『吉田健一』（新潮社、二〇一四。以下、「長谷川評伝」）を読んでいて、気になる文面に出くわした。物語の中盤（全十六章のうち第八章）、のちに団塊世代と呼ばれる人びとがこの国に生を享けつつあった頃の話である。

吉田健一（一九二二—七七）は単行本としての処女作『英国の文学』（初版^①雄鶏社、一九四九）によって間もなく物書きとしてブレイクすることになるが（次の第九章）、世間的にはまだ「宰相の御曹司」——当該第八章の標題であって「宰相」とはもちろん時の総理大臣の吉田茂（二八七八—一九六七）のこと——で、まずは翻訳の腕前で名を馳せていた。そんな一九四八（昭和二十三年）の行で、八月に出版されたキルケゴールの「追憶の哲理」（大地書房）は、堀田善衛との共訳だが、これに関しては堀田善衛がこんな記述を遺している^②として、三百余文字にインデント処理を施した引用段落を充てている。（同書、二六一頁。孫引きにあたって傍点とルビは紙面記載どおりに転載。）

……昭和二十二年、物凄い貧窮のドン底にいたとき、斎藤正直さんが僕をあわれみ、キ氏の ヴィツ・ヴィー・ヴェリタス^③（酒のなかに

真理あり）という、随想風なモツアルト論（と僕は諒解しているが）の仏訳本をもって来て、僕に、やれ、と云った。一読、何のことも半分もわからなかった。が、僕は訳した。無茶な話だ。停電の多い頃で、僕は机も万年筆ももってはず、油煙の立昇るランプをともし、顔も鼻も真黒にしてタタミの上に腹ばいになってエンピツで訳していった。とにもかくにも訳了えて、吉田健一氏に見せた。吉田氏は、長考一番、ウームウームとうなった。訳本は「憂愁の哲理」という題をつけられて世に出た。本を見た時、顔が赤くなった。それきり、僕は病気になった。

右でも評伝紙面でも、どっちでも見落とされそうな小さな「ママ」のルビが、「憂愁」の二文字に振られている。書名は「追憶の哲理」ではなかったか。自身が訳者に名を連ねる本のタイトルを、堀田善衛（一九一八—一九八）は間違えている。うっかりミスにも程がある。

だが当座、注目したいのはこの指摘された誤植／誤認ではなく、同じルビが振られるべきなのに目下、見過ごされている別の文字、つまり「酒のなかに真理あり」の直前の表記である。ラテン語の格言「*in vino veritas*」としてそれなりに名高いもので、ふつうカタカナだと「イン・ヴィーノ・ヴェリタス」くらいに綴る（日本語訳としても他にラテン語出自

であることをカタカナまじりで暗示した「酒中ニ真理アリ」などがあって私はこれを好む者だが、さらに最短だと「酒中真」というのさえある。訳出に携わった知識人・堀田であれ、担当した編集者であれが、「イツ・ヴィー・ヴェリタス」なんていう初歩的な綴り間違いを犯すだろうか。

堀田証言の余滴をカギ括弧「」で掬って始め、同訳本に係る記述をそこで終わらせる、右に続く地の文に典情報らしきものが読まれる。

「いまでも稀に、あの本のことを言う人がいる、言われると僕は堪忍々々と言つて逃げ出す」とあるが（「戦後十年の忘れられぬ著作」）、そんな訳稿を押しつけられて、最大の被害者は吉田さんであったというべきだろう。戯文とはいえ、戦後の翻訳ブームが粗悪な（「無茶な」）訳本濫造の時代でもあったことが想起される、そんなエピソードの一つといえるかも知れない。

物語の主人公は「吉田さん」と呼ばれている。伝説の小沢書店を若くして立ち上げて編集者としても晩年の吉田健一の警咳に接しえた特権者として確信的に選んだ作法にちがひなく、それにはただ羨望だけを述べておくのだが、それはさておき、「…逃げ出す」で堀田の証言が終わった直後、「戦後十年の忘れられぬ著作」が丸括弧（）で括られている。その文字列で検索したら、彼の二種ある筑摩書房刊の全集（活版による第一次Ⅱ一九七四―七五、DTP移行後の第二次Ⅱ一九九四―九五）のいずれにも同題の文章が収録されていることがわかった。堀田善衛のことはさして関心がなかったが、調べてみた。

些末と感じる向きはあるだろう。ならば次の一段落をすつ飛ばし、直後の要約だけを読んでもらえば良いように配慮するとして、まずは存分に書き留めさせてもらうなら、――

調べは最初、図書館の開架書庫で簡単に手にとることができる第二次全集（第二五巻、一九九五）の頁を繰って、「イン・ヴィノ・ヴェリタス」の正しい（と言える）記載で載せていることを確認し、それで済んだように思ってしまった。が、それだけで長谷川評伝が引用をしくじったと帰結して良いものか、の疑念（自省の念）が湧いてきたので他日、閉架庫に収まる第一次全集（第一六巻、一九七五）と、また後から疑問が発生する面倒を避けたいので第二次全集紙面に載っていた書誌情報に従って初出とされる総合誌『世界』（岩波書店）一九五六年一月号に、一気にあたることにした。正解だった。「イツ・ヴィー・ヴェリタス」の誤記が両紙面に見られたのである。常識的に考えられるのは、最初の全集が初出紙面にすでにあつた誤植を正しく引用した――その正しさを長谷川評伝も継承したので誤植が保存された――、そんな可能性だけである。評伝による誤引用をほんの一時でも疑ったことは申し訳ないことであつた、と書いたら嫌味っぽく聞こえてしまおうが――でも「憂愁」の文字の場合と同様に「(ママ)」のルビを付す手はあつたのである――、校正を難ずるなら岩波書店『世界』の発行元の編集者こそを呼んでこいという話にもなる。ちなみに自力で修正したように見える筑摩書房だが、誤植の発見そのものは研究者を含む教養ある読者（ら）や、あるいはまだ存命中だった作家本人だった、そんな可能性ももちろんこの時点では捨てきれない。

共訳の倫理

お約束の要約である。堀田善衛「戦後十年の忘れられぬ著作」は一九五六―九五年の四十年間のほぼ二十年おきに三度、文字として組み、最後の機会に誤植が正された。右ではこの経緯――というより事情

判明の経緯（とそれに沿った私の精神の起伏）——を委細に報告したのだが、調査自体は誇るほどの労力を要することもなく一大学図書館であつて、けなく終わったのだつたし、誤植、それ自体は本、当、に取るに足らない。

そう、どうでもいくらい些末な話なのだが、にもかかわらず私自身は、変色や虫食いもあつて数年後には読めなくなりそうな初出誌面を調査の最終段階で目視したときに別の、それ自体はやはり小さな発見をしておおいに驚き、そして思弁を新たにしたのである。

まずは「戦後十年の忘れられぬ著作」の題である。半ば予感しないでもなかつたのだが堀田本人が付けたものではなかつた。一九四六年一月の創刊から十年を迎えることを『世界』誌自身が記念し、十三名（正確には翌月の十一名もあわせると二十四名）の左翼系知識人に発せられたアンケートの、それは企画名なのだった。そうして現に、そこに挙がついて「著作」の大半はいまではほとんど読まれなくなつたものではあるものの各人が誠実にお題にふさわしい書名を記して回答しているなかで、ひとり堀田善衛だけが個人的な、しかも思い出したくもない思い出を語つて、完全に浮いていた。

見ための悪ふざけぶりの限りでは「戯文」の長谷川評はおおいに正しい。浮きつぷりは実際、本人も予感して、現に回答の冒頭が以下のようにその言い訳から始まつている。（新字にあらたまつた第二次全集を底本とし、問題箇所をすこし過ぎたところまで引用する。）

このお答えに、次のようなことを書いてはいけないのだろう。この十年のあいだに出た優良なる書物、立派なる書物のことを書くべきなのだろうが、僕自身どうしても忘れられない書物があるから、そのことを書いておく。いけなかつたら、編集部がボツにするだろう。：「改行は省略」：僕が、吉田健一さんと一緒にではあるが、

キエルケゴールのものを訳したことがある、と云うと、大ていのは目をまるくして、まじまじと僕の顔を見るのである。それは昭和二十二年……

最後の「昭和二十二年」は、長谷川評伝の引用部冒頭のそれでもある。省略した改行からそこまではほんの八〇字ほどのだから最初から例の引用に含めてくれれば良かったのに、とは素朴な感想だが——隠れキルケゴードイアンの私は彼を「キ氏」としか呼ばない、非礼をあやうく難ずるところだった——、それはさておいても、いかなる事由で彼が「病気になるほど恥ずかしい思いを味わい、それをまた恥をしのんで明かしたのか、の疑問があらためて起こってくる。

しかし、素直な国語力でもって堀田の回答全文を読めば、事由は大きくは二つに限られる。一は、訳本の出来がやはり酷いままで世間に醜態をさらすことになつたから。二は、その逆である。簡潔に済ませたいひとのためにはまた後の段落に要約を載せるので、私の感性が選ぶ「その逆」の事由について、またしても次段落を詳述に充てさせてほしい。すなわち、——

たしかに酷かつた堀田善衛の訳稿の、その酷さの程は、貧窮を見かねて救いの手を差し伸ばした版元として「斎藤正直」というひとの目にも明らかだつた。こうなつたら原稿料は折半になつてももつと語学力のある共訳者を付けるほかない。堀田より六歳年長の同人仲間（『批評』誌の）で、翻訳家として定評を得ていた「宰相の御曹司」——しかし同時に「乞食王子」の渾名もあつたくらいでやはり経済的に困窮はしていた——に白羽の矢が立つた。原文（重訳のための仏訳本の頁）にも時おり目を落としながら手書き原稿を数枚繰つた吉田健一は「長考一番、ウームウームとうなつた」（堀田）が、うなり声が向けられたのはフランス語としての

難解さにたいしてではなかった。語学力もさることながら何より矜持のゆえ、「訳本濫造」（長谷川）の巷にあふれるのと同種の「粗悪な…訳本」

（同）の表紙／背／奥付に訳者として自身の名が刻まれることを、吉田は潔しとしなかった。「直しても本当にかまわないのですかね？」と、たぶん念は押したことだろう。これを版元も、キルケゴールになぞ端から関心がなかった堀田も是としたが、最初の訳文の面影がなくなるほどの徹底的改稿になるとは、両者とも予想だにできなかった。だが、浄書された原稿用紙が届き、理解できるものとなった文を読んでまず版元が一驚。「この労苦に報いましょう」と共訳者（この場合は堀田善衛を指す）に提案し、先に「吉田健一」の名を掲出することになった。すでに気がなかつた堀田が他方、訳文に接したのは、本ができて書店に並ぶ段になってから。「何のことやら半分もわからぬ」いまま、「とにもかくにも、訳し了えた」文が、版元が伝えてきたニュアンス以上に上質な、見違える日本語に置き換わっていた。堀田には発する言葉がなかった（失語症になった）。

要は、自分の手に負えなかつた翻訳が吉田健一の力あつて見事に成つたのがショックだった、という仮説だが、大筋で受け入れてもらえるなら、共訳とする提案／判断——これがなされた瞬間に何ごとか個人訳とは異なる倫理的契機が発生するのは明白である——の主体や時機などの前提や細部が事実とちがつている可能性を想うとしてもそれには目をつぶって次節へと読み進み、私が物証の申告をもつて右を臆断以上のものとする論述に接してもらいたい。

その物証とは『追憶の哲理』の現物。吉田健一フリークの間では稀覯本扱いのそれを手にとる幸甚に与つたら、その瓢箪から大きな駒が飛び出してきたのである。

戯文の告白

冒頭の、長谷川評伝からの孫引き部分にまで戻る。

そこでは、誤植だけを問題にした「イツ・ヴィー・ヴェリタス」の文字の直後、「（酒のなかに真理あり）」という、随想風なモツアルト論（と僕は諒解しているが）の仏訳本と綴られていて、私は当初、その一つ目のカッコ内の文字を堀田による内容要約のように読んだのであったが——注意深いキルケゴール学者が見たらその段階でちがったかもしれない——、『追憶の哲理』の背から剥がれそうな表紙をおそろおそろ中扉には、「なか」を漢字表記とした「酒の中に真理あり」の文字がまるで書名のような大ききで記されていた。しかも、扉をくぐって中へと分け入り、理解できるといふ以上によく出来た日本語の本文をほんの少し読み進めると、右のように特筆大書されていたものが本場に正しい書名で、つまりは重訳紙面同士——こちらの仏訳本にたいしてこちらは独訳本を底本とする違いはあつても——を照合し合えば、すぐ、本邦では現在でもその哲学者のテクストのもつとも参照しやすい日本語訳である白水社版『キルケゴール著作集』第十二巻（一九六三）所収の佐藤晃一訳「酒中に真あり」と同一の原典にもとづくもの、とも判明した。

舞台はコペンハーゲン郊外の鬱蒼とした森の奥にある屋敷。そこに五人の男が集い、酒を飲み交わしながら恋愛、女、そして結婚について順に演説する、と約めてしまえば物語の筋はそんなところだ。だから「随想風なモツアルト論」という堀田の「諒解」はここでも頓珍漢と言うほかないのだが、^⑧いづれにせよ、そうしてプラトン『饗宴』を下敷きにして、いることが明々白々の同作に著者が此処ぞと採用した「in vino veritas」のラテン語出自の題を訳者らは少なくとも表紙／背／奥付からは捨て、一見したところ似ても似つかぬ「追憶の哲理」の書名で江湖に

問うたのである。

とんでもない話だ。「キ氏」が知ったら激怒するはずだが、そんな愚行に理を見てとる立場もありえなくはない。作品としての構造を事由としてもちだす手である。すなわち、五人の男が登場する以前と以後のいわゆる枠の部分で、正体が明かされない（私）——プラトンにおけるアポロドロス以上の存在である——が登場して特にその前の枠で、「記憶」と似て非なる「追憶」の効用を長々と語り、続く本論相当部分がまさに後者「追憶」の実践となっているのだからである。

そうして実際、「追憶」の文字はかの中扉で、「アフハム」という偽装された固有名詞をその行為主体とした副題^⑧として記載されさえる。それとても否、「哲理」の語と結びつけ、作家の選択とすり替えて書名へと昇格させるのを是とするほどの根拠になるとは私は断固、思わぬ者だが、いずれにせよ、そんなことや別のものともらしい、目論見——ここからいくつかの改行をはさんで最初に出会う引用段落中でのその一例を示そう——は書籍本体のどこかでひと言、断つてしまえば、罪のない逸話で収まったのである。ところが、そういう言い訳を記すとすればそこが最適だろう「あとがき」に載っているものと言え、当時ですらキルケゴールを少し齧^{かじ}ったことがある者なら書ける程度の情報（概説的知識）と「翻譯にあたり、堀田が一應全體を譯し、ついで吉田と詮議しつつ検討補正を行ったことを符記する」といういかにもな断り書き、ただそれだけである。

この「符記」の嘘^{うそ}つばち——なぜといって真実なら「本を見た時」に堀田があんなに赤面することはありえない——を、ないと言えば文責記載もないので万が一の確率でとなるが吉田健一が書いたのだとしたら彼も相当に意地が悪いが、高い確率で堀田善衛が書いたのであったとしてもその「あとがき」の初期文面だけは律儀に保存することをとおして吉

田は堀田に、訳文そのものによる以上の決定的打撃を与えることになった。

打撃は容易に立ち直れない傷^{トラウマ}となったが、いまやそこそこ売れっ子の物書きとなりつつあった矜持をももって堀田は後日（七年余を経て）、「書く」ことでその記憶を抹消しようとした。それは床に伏すほどの傷だったとまで大げさに表現しながらも事由は明確に明かさず、そうして「戯文」（長谷川）を装った時点で十分には誠実だったわけではないものの、なんとか回復は成ったのだが、書き誤り——誤認でもましてや、たんなる誤植でもなくフロイト的な「言い間違い」に準じて選んだ——はひそかに起こり、そうして半世紀以上が経ってからこうしてほじくり出され、真理をいつそう明白にさらす場所となるうとしている。

かくして私はこう期待を書き留めることになる。——第二次全集の刊行からすでに二十年以上が空いたのでそろそろ企画されてもおかしくない堀田善衛の第三次全集が「戦後十年の忘れられぬ著作」を収載するにあたっては、「(ママ)」のルビを付すだけで「憂愁」の文字は残したうえで以下の、一見長くてもこれでも最小限となる解題を付してはくれまいか、と。

初出は『世界』（岩波書店）の一九五六年一月号の同名のアンケート企画への回答欄で、第一次全集からすでに収載。かくして第二次全集でも採られた経緯を踏まえてタイトル表記は変更しないことにするが、ところで文中で触れられる翻訳本を手にとった堀田がはげしい羞恥を味わったのは活字となった訳文を読んで初めて吉田健一の出来の良い改稿ぶりを知ったからだ、と推量されるものの、本当に病気になるまではさておいても記憶からこの出来事をしばし消そうとしていたのは確かと思われる、その証拠に、「酒の中に真理あり」

vino veritas」を同書の題としたキルケゴール本人に逆らった訳題は正しくは「追憶の哲理」であるはずなのに、刊行から七年余しか経っていない時点で「憂愁の哲理」と書き誤ってさえている。この誤認のことは第一次、第二次のいずれの当全集も見落としていて、長谷川郁夫『吉田健一』（新潮社、二〇一四）での引用をきっかけにして発覚してこのたび初めて注記されるのだが、さらに一点、詳細な情報を付記するなら、「憂愁の哲理」の表記自体はすでに第二次世界大戦前、当代の北欧学者であり児童文学者でもあった宮原晃一郎が同哲学者の『あれか、これか』所収の一篇「ディアプサルマタ」の訳書を単独刊行する際に訳題として採用し、かつ版を重ねており——『追憶の哲理』と同じ一九四八年にも版があらたまっている——、つまりは版元の大地書房が「二匹目のドジョウ」を狙って訳者らに採用を強いたのだと推測される。ならば、この経緯／背景を踏まえて当第三次全集が「(ママ)」のルビを振って「憂愁」の誤認を残す判断も、きつと是認されることだろう。

前半はおおむね本稿のここまでの要約。だが終盤、件の過てる訳題選択に係って予告してあった「別のもっともらしい目論見」の具体例の一として、本邦キルケゴール研究余録となるかもしれない情報を書き添えたのだが——注釈まで付けているとおりそれは事実である——、こうして成ったものがはたして書誌学的文学研究の戯文でないのなら、私はそれにインデント処理なぞ施さず、堂々と地の文としたはずだった。

そして、ならばこの装われた詳述こそは、いかにも逆説的だが、本稿が真に、関心を寄せるのは堀田善衛ではないから、それ以外の理由によるのではない。

文学の言葉

そう、作家研究の余録となるものは提示してみせたが堀田善衛はしよせん添景であり、かと言って主役であるはずの吉田健一にかかわって、われわれは、彼によって改稿がなされた『追憶の哲理』の訳文の優秀を前提するばかりで、たった一行、それを引用することさえを怠ってきた。

だが、これにこそは正当な言い訳がある。例の「あとがき」はむろん、本の他のどこを探しても、底本の書誌情報どころか仏訳本を底本にしたという断りさえ一切が、記されてはいないのだからである。

というより、吉田健一と堀田善衛の共訳——この表記順が私の関心の順でなく版元が選んだものであることは既述のとおりである——なのだから、端からデンマーク語原典からであるはずはなく、また独訳からの重訳でもあるまいと推測してはいたが、「斎藤正直さんが「∴」仏訳本をもって来」という堀田証言を（有用なることは疑い得ない長谷川評伝をとおして）知ることができたのでフランスにおけるキルケゴール受容史を繙いてみると、件の「in vino veritas」の同国内での一九四七年以前の訳業と同定しえるものをたった二件、しかし同じ一九三三年に見出すことになるのだから、まるで誰かが最初から底本探しを困難たらしめようと企んでいるかのようではないか。

やめだ。二件のうち片方の入手はなんとか成って底本もほぼ確定できたのだが、そんなものが何になろう。もちろん有用と見なされる細部について注記することまでは禁じないとしても——現に一箇所について実施することにする——、中途半端な照合をこの研究ノートの論旨本文に組み込むことははや放棄し、共訳者として記されていた堀田善衛の名も消しさえして、『追憶の哲理』のある頁に載る吉田健一の文を、ただ文

学の言葉として閲してみようではないか。(旧字はPCで現時点でも入出力可能な文字のみ、そのまま残した。)

グリプスコフの森の中に、「八角路」と呼ばれてゐるところがある。どの地圖にも書き示しては無いのだからこれを見付けるのはなかなかやさしくはない。この名前自體が言葉として一つの矛盾である。八つの道路の交叉點がどうして一つの角をつくりうるであらうか？又公の人のよく通る道がどうして孤立し秘められた場所ということと付合しうるであらうか？又もし孤寂を愛する者が恐れてゐることが三叉路トリヴィウムに基く通俗さトリヴィアルテといふことであるならば八つの道が出合う地點とは、これほど通俗的なものはないであらう。しかしながら、矢張り八つの道路があるのだ。しかしそれにもかかはらずそこには何といふ寂けさがあることだらう。……通りすぎる者を抵抗しがたく孤獨な呪縛にひきこむ誘ふような呼び聲に身をまかせ、森の奥深くへみちびいてゆく細い誘惑的な小路を辿つてさえも、人々は誰も訪はぬこの八つの道ほどの孤寂に達することはありえないのだ。それは恰もこの世が突然砂漠となりただ一人生き残つた者が彼を埋葬してくれるものが他に誰一人あなくなつて困惑しているかの如きものなのだ、又それはあたかも人間世界全體が八つの道から逃亡し君一人が忘れられたかのやうなのだ。若し bene vixit qui bene latuit^{**}といふ詩人の言葉が眞實であつたならばその時私はまことによく生きたと云えるであらう、何故なら私は私のこの片隅を選んだのだから。(**) 旨く逃げたものが旨く逃げたのである。)

例の前の、枠の終盤で語られる、饗宴の舞台となる屋敷のロケーションに係る記述である。ただ文語調／旧字旧かな遣いだからというのではない

い格調が備わる、とか何とか書いたとしても、ただ私が吉田健一の愛読者であることを明かす以上のものでもないもので、ならば代わつてまず申告しておくべきは、作品としての、「酒中ニ真理アリ」——吉田健一／堀田善衛の兩名の名が訳者としてクレジットされる書籍『追憶の哲理』ではなくキルケゴール作品という觀念に言及する場合は(好きだと明かしておいた)このカタカナまじりの文字列を「重カギ括弧」で括る表記を採る——もそのカテゴリーにふくまれる、対話篇という種類のテクストにかんする見識についてであるだろう。

いかにも乱暴な整理になるうがそれはまさにプラトン以来、何がしかの蘊蓄を語る間接話法のスタイルだった。そうして哲学畑の人はふつう、その構造を前提したうえで原著者がそれぞれの語り部——プラトンにとつてのソクラテスであれヒューム(『自然宗教に関する対話』)にとつてのクレアテスそれともフィロであれ——に託した内容を汲み取るのを主要課題としてきた(と私は推測する)わけだが、稀代の多重人格者キルケゴールを読む者は、プラトンも真つ青の間接話法の超絶技巧のようなものに惹きつけられ、あるいは逆にそれゆえに突き放されてきた。

実際、「酒中ニ真理アリ」においてキルケゴールは、五人の饗宴参加者のうちの三(ないし四)人に、十八番となる偽名作法を駆使した過去の自作の著者／刊行者(と偽装される者)や登場人物を(再)登場させ、われわれをますますの混乱に陥れる。もちろん固有有名詞や設定が同じでもそれで同一人物とみなすのではあまりに幼稚すぎるが、いずれにせよ五人の登場人物が恋愛なり女なり結婚なりについて語るソレであれ、その対話(演説の束)を追憶する(私)が追憶すること、それ自体について語るソレであれ、の蘊蓄——いずれの邦訳においても前者はデスマス調で、後者はデアル調で訳され、日本語だとしてもそうなる点でも構造／形式上の階梯差は明白なのだが——で全編が埋め尽くされているかのごと

くであるなかで、たとえば右のロケーション記述にはそうした対話篇に
 ありがちな偉ぶる口調が後退して著者の、とりわけキルケゴール学が「審
 美的」と分類する著作群に特有の文学的想像力が横溢し、そこに、それ
 を綴る言語——この場合はデンマーク語でなく仏語なのだが——と日本
 語の両方を駆使する者の才が化学的に融合することになった。

とすればそんな品質は、例の白水社版著作集の佐藤晃一訳はむろん、
 早くからデンマーク語原典から訳して読みやすさの点でも定評があった
 榎田啓三郎訳においてさえ、十分には実現してはいなかったと感じられ
 るのである。(こういう書き方をすると、まるで最後に『追憶の哲理』が登場
 したみたいだが注⑦にも記したとおりそれが同作品の本邦初訳である。)

題の不義理はさておくなら、こうして吉田健一がキルケゴールに報い
 たのはもはや明白と思われるが、同時に私は、逆にキルケゴールもまた
 吉田健一に報いたのだ、と提起したい気持ちに駆られている。この態度
 は当然、「吉田さん」は翻訳の「最大の被害者」だったと記していた長谷
 川評伝に噛みつくことをも意味する。キルケゴールを訳したという「大
 ていの人は目をまるく」すると堀田は何らの屈託もなく書いていたので
 あり、彼をやはり添景とする評伝もまたその言を真に受けたようであつ
 たのだが、かねてよりその異形の哲学者とわれわれの文士の双方を愛読
 していた者としてはそのとりあわせに違和感を抱かないどころか、過て
 る書名を与えられた『追憶の哲理』という書物の結節点を得て、いよいよ
 次の仮説(直観)に確信をもてるものとなった。

すなわち、吉田健一「金沢」(河出書房刊行の『文芸』一九七三年三月号。
 同年七月に同社から『金沢』として刊行)にキルケゴールがひそかに実りを
 もたらしていた、という仮説である。

饗宴の場所——続編のために

いきなり私事にかかわる言い訳を綴り、挿入する。——
 二〇一六年度、私はサバティカルの年を石川県金沢市で過ごした。受
 入機関は「公益財団法人」金沢芸術創造財団で、傍目にはアリバイづく
 りのように見えたであろう仕方と間隔で版画制作(金沢湯涌創作の森)と
 ボランティア(金沢市民芸術村)にも精を出すほかは、書きたかった論文
 を書き、読みたかった本を読み、そして冗談ではなく酒宴／饗宴に何度
 も興じて美味しい酒と肴に舌鼓を打った。

それら諸成果のうち、私があいかわらず自由な視点、方法、文体を保
 全するために「研究ノート」を名乗らせる論考は、「貞節のとびら——歌
 劇「フィガロの結婚」第二幕における性愛の表象」(『立命館文学』六五一
 号)として結実した。通常の教育負担から解放されないと書けたはずが
 ない代物で、同じモーツァルトを論じる先行研究のなかで基本文献とし
 て明記したのは音楽にかんしてもプロと評すべきアドルノの——彼の
 ようには書けないから違った方法でと強く意識した——、翻って二、三
 箇所ですく軽く言及した以外は表に出さなかつたがつねに意識していたのは
 同じ音楽のアマチュアのくせに口を噤まず好き放題をモーツァルトにつ
 いて語るキルケゴールだった。勢いに押されて彼の、とりわけ同じ審美
 的とカテゴライズされる著作の数々——いずれも榎田訳による『誘惑者
 の日記』(ちくま学芸文庫)、『反復』(岩波文庫)、そして「酒中に真あり」
 (注⑦に記した榎田訳が存在することは長く知らなかつた)——を、私はほと
 んど哲学者のそれとは考えずに耽読したが、そういうなかで、せっかく
 金沢にいるのだからと久びさに手にとつたのが「金沢」だった。それは、
 吉田健一が自身の金沢滞在の経験にももつて書いて書いた「酒中二真理ア
 リ」に他ならなかつたが——それは私ならずとも一読した誰もが使う

る評言であろう——、金沢市内のさる古書店のガレージセールで、その時点ではまだただの稀覯本だった『追憶の哲理』と偶然出会い、驚くべき廉価で購入する幸いに恵まれたとき、直観は真実味を帯びることになった。

したがって、ここまでの本稿の論じ方は、本来は、二〇一六年秋の同書の古書店での発見に始まり、サブタイトル明けの二〇一七年夏に長谷川評伝の誤記載の件を知ることになる、そんな時系列を反転させることになったものだが、そうした経緯を忘れないうちに書き留めておかねば、と取り組みはじめた当初（二〇一九年晩秋）はこれくらいの文字量でもっと深入りできているはずだった構想が狂ったので（時間切れの謂いでもある）、本当に急遽、二部構成へと変更することにした。右だけでも資料紹介——掲出している論題からすると堀田善衛のほうにウエイトが置かれていることに？——程度の意義はあると高を括る者だが、いまや少しく本稿執筆の動機を明かしたうえで、前節末でやつとたどり着いた吉田健一「金沢」のせめて概要を述べ、論点を粗描し、そうして続編にたいする期待を芽吹かせておきたい。

*

小説「金沢」はしかし、まずもって要約が容易ではない。よくできた先行例——白山麓僻村塾創立27周年記念シンポジウム「吉田健一の金沢」（二〇一五）の壇上で文芸評論家の湯川豊が司会者（池澤夏樹）から求められて語ったもの——を参照し、「他人の禪で相撲をとる」手法を採りた

い。「ご指名を頂きましたが…非常に損な役回りです（笑）。これは要約不可能の小説で…」と正しく前置きし、「まだお読みでない方がタイトルから金沢のことがたくさん出てくるとお考えになると肩すかしを食うと思います」と期待も適度に往なして述べられたあらずし自体は、以下がす

べてである。

主人公は内山という男で、東京・神田の裏通りの屑鉄問屋ということになっていますが、この屑鉄問屋が大変なもので、ヴァレリーやベルクソンを読む。ほかの登場人物も、みな半身は人間で、もう半身は神様のような存在です。内山が金沢の犀川左岸の崖の上、路地の一番奥にある茅葺きの家を求めるところからこの小説は始まります。一切の世話をするのが骨董屋の男。神出鬼没のこの男は名前とは与えられず、小説の中でただ骨董屋とだけ呼ばれます。全部で六章。各章にわたって、不思議とも奇怪ともいえる金沢住まいの人間たちが登場し、内山とさまざまな議論を交わします。ここで交わされる議論は必ずしも金沢に関することではありません。時間や空間、生と死、そして芸術とは何かといった人間の根幹をめぐるもので、一つずつ紹介していくと、日が暮れてしまう。

前置きにあつた「損な役回り」は謙遜以上の表現で、それなりの事前準備もあつたことを推測させる巧みな要約である。とくに上手いのは最後の、そこで交わされる議論（蘆薈）なぞいかに高尚でも端折つても損失のない空虚なものでもあることを示す、打棄り方だ。本稿もそれに倣つていまはこの「議論」の中味には踏み込まないのだが、真に作品の要約たろうとするなら決定的に物足りないと感じられる、別の不満もある。

第一に、すべての議論の場に酒があつて、つまり酒宴としてそれらが営まれていることへの言及が欠けている。（ただしこれは部分Ⅱ「あらずし自体」を引用しているからであつて、全体を読めば「酒」はシンポジウム全体に染み渡るキーワードの one となっている。だから私の難癖。）

第二に、「全部で六章。各章にわたって…」と平準化されているけれど

も最後の第六話——私は吉田健一が本文分割のために与えているIからVIまでのローマ数字については「章」ではなくその「話」の表現を採りたいのである——だけは他と異なっていて、先行する五話の登場人物がそこで勢揃いして文字どおりの饗宴となる、その構造が見えない。実際、私は初めて読み通したとき最後の第六話に来て、腰を抜かさんばかりに驚き、かつ、ある意味そこまで耐えて読み続けたのである忍耐を自賛もしたのであり、ならばシンポジウム壇上ですべてのネタをばらす必要はないのだとしてもせめて末尾は、「一つずつ紹介していくと、日が暮れてしまうのですが、でも皆さん、そこで読むのをやめてはいけません。最後の最後であつと驚くことが起こりますから」程度には語って焦らしてほしかった。

いずれにせよ、しかし五つの酒宴があつて、最後に饗宴となるのである。そう、饗宴といつても順に演説が述べられるプラトンのなそれではなく、むしろ朦朧法が極まって台詞がどの話者のものなのかの識別の意義も薄れて、ただ別れのための長い余韻を保全するための場所となつてい、と私は読む。と同時に、最後がそういう具合ならば、五人の男が饗宴会場に駆けつけるのに先立つて、主人公（と呼びならわしている）内山なる酔狂者が（妖精のような骨董屋に時に誘われて）それぞれが居る場所に逆で馳せ参じて文字どおりの対話を交わす第五話までが、つまりは特権的な聞き手がそれぞれの語り手から蘊蓄を引き出しているようである限りにおいてほとんど伝統的な、すなわちプラトン／キルケゴール的な饗宴の、その変形となつていとも解釈しうるのである。

そうなると広義には、個別の酒宴がおこなわれる諸所を抱えもつ広域金沢圏の全体をこそ、真に饗宴の場所と名指さねばならないことになるが、これを吉田健一の徹底的な作為／構成とみなす私の語り口はいまだ臆断のそれであり、より説得力豊かな叙述——論証にたどり着くことは

ありえないとしても——とするには「金沢」を、ここで急ぎ足でおこなつてようなものではない、多少とも精読に供さねばならない。

それはひよつとすると金沢に現に居ないとわからず、あるいは金沢に居続けると逆に見えてはこない、われわれの作家や私がそうであったような移動者のみを知りうることもかもしれず、それを私は、「吉田健一」「金沢」を金沢で読んで私が発見した二、三の事柄の題（当初は本稿に充てようとしていた）で書き継ぐことになる。しばしの猶予をいただきたい。

注

① ここでわざわざ「初版」の文字に注を付すのは、吉田はのちに同書を全面改稿して「定本」と銘打った版を一九六三年に刊行（垂水書房）し、集英社刊『吉田健一著作集』（第一巻、一九六四）や新潮社刊『吉田健一集』（第一巻、一九九三）等への再録は通常、この定本版によってなされるからである。なお、後者『集成』で明記されているのを読んで私も初めて明確に意識することになったのだが、吉田は基本的に既刊本の全面改訂などはおこなわず、したがってこの『英国の文学』だけが例外ということになる。

② つまり堀田はたぶん、この一九五六年当時はさすがに「エンピツ」ではなく万年筆によつてだろが、「イン・ヴィノ・ヴェリタス」と正しく書いて、それを活版工が「イツ・ヴィー…」と組み間違えたに決まつてい、本文中と同様、私はここでも断言してしまうのだが、というのも、活版印刷時代末期の、入稿も手書きの原稿用紙でだった一九八〇年代中葉にさる学術誌の編集補佐で鍛えられた経験にもとづいて書く、汚い手書き文字の読み間違いなぞ、活版工に責任を押しつけられない当たり前すぎる日常茶飯事で、だから校正の役割が重大だったのだからである。

③ まず題目について書くなら、私が編集委員なら堀田の全集への再録にあつては、ここでさしあたり「アンケート」「戦後十年の忘れられぬ著作」への回答」と表記するものの外側のカギ括弧「」を四角括弧「」に替えて記載するのが妥当、と主張したいところだ。

と、その件はそれで切り上げ、以下には、ちょっとした感慨（隔世の感）を味わえるかもしれないので、二号にわたった企画に応えた、堀田以外の二十三名の名を挙げておく（掲載順、慣例にならう程度に新字に変更）。竹内好、木村禧八郎、田中慎二、清水幾太郎、野間宏、大内兵衛、白井吉見、家永三郎、丸岡秀子、高島善哉、鶴飼信成、木幡操（以上が一月号で、堀田は丸岡の次に掲載）。大河内一男、阿部知二、岡本清一、小田切秀雄、桑原武夫、松方三郎、戒能通孝、松岡洋子、吉川幸次郎、杉捷夫、古在由重（以上、二月号）。

④ 長谷川評伝を通して読んでみると気づくことができるはずだが、部分引用しかしていないので念のため記しておく、このひとは本文の直後の行にでてくる同人誌『批評』にやはり集った仏文学者で、さらに調べたら、同じ大地書房からモーパッサン『水の上』の翻訳を準備中か刊行直後（刊行は『追憶の哲理』と同じ一九四八年）だったようである。

⑤ 共訳、とくに三人以上ではなく二人——しかも教育的であったり搾取的であったりしうる師弟や兄弟弟子の関係にもない——のそれにおいて一方が他方の訳を徹底して直す、そんな絵図は、次の翻訳書の「訳者あとがき」における告白と出会えなければ抽象的なままにとどまって、自身の具体的考察の作業仮説とすることまでは、ありえなかつた。すなわち、ハンス・コンツェルマン、田川建三／小河陽「共訳」、『新約聖書神学』（独語原著Ⅱ一九六七。新教出版社、一九七三）、その田川による「訳者あとがき」の五三四—五三五頁を参照。

ちなみに、名著の誉れ高くドイツ本国のみならず多くの国で版を重ねる同書への、訳者でありながら田川がなす痛烈な批判は、それ自身が、新約聖書神学の第一級の（批判的）研究と位置づけうると踏む者だが、きつと「訳者あとがき」のゆえであろう、管見の限りでは数多ある田川の論集のいずれにも収載されていない。同じコンツェルマンの『時の中心——ルカ神学の研究』（新教出版社、一九六五）や師エティエンヌ・トロクメの『使徒行伝と歴史』（新教出版社、一九六九）に添えたもの等も含め、田川が書いた訳者解題（たんなるあとがきではない）を集成する意義は小さくない。——と、ここに書いても「場所がちがうだろ」と叱られるばかりだろうが。

⑥ 角地幸男は、吉田健一の翻訳作法について詳述する興味深い論文（書誌情報は左記）の冒頭、入手と検討が叶わなかつた同書にまつわって、「手にしたこともない本について語ることは出来なくて、吉田健一がかねがね言っていたように本は読んで初めてそこに姿を現わすものであるという論法でいけば、今のところこの吉田・堀田訳「追憶の哲理」という本は少なくとも筆者にとってはこの世には存在しないということになる」とさへ述べている。角地幸男、「吉田健一と翻訳の文体」、『城西大学女子短期大学部紀要』一〇、一（一九九三／〇一）、一一—一九頁（とくにその一頁）。

⑦ 「原典」と表記すると、大谷長が監修して長期をかけて成った、創言社刊『原典訳記念版キェルケゴール著作全集』（全一五巻、一九八八—二〇一一）を指すと読むむともあるが、私自身は他にもデンマーク語にもとづく訳はあるのに同全集だけが何ゆえ「原典訳」を誇る（「記念」する）のかといった詳細事情にまでは関心がない、非キェルケゴール学者なので、ここはデンマーク語のテキストを指すという程度に理解してもらって良い。

そのうえで、ここで重訳を含めて成った同作品の邦訳のすべて（本文中すでに触れている吉田／堀田「Ⅱ（一）」と佐藤晃一「Ⅲ（三）」のそれぞれによる訳書は略記）を刊行順に列挙すると、以下のとおり。（一）吉田／堀田による訳で『追憶の哲理』（一九四八）Ⅱ 仏訳本からの重訳。（二）中澤洽樹による訳で「酒中真あり」、『キェルケゴール選集 人生行路の諸段階（上）』（人文書院、一九四九）の第一部Ⅱ 独訳本「シュレンプ訳」からの重訳。（三）佐藤晃一による訳で「酒中に真あり」（一九六三）Ⅱ 独訳本「ヒルシユ訳」からの重訳。（四）榊田啓三郎による訳で「酒中に真あり」、『世界人生論集 16』（筑摩書房、一九六四）所収の編Ⅱ デンマーク語の全集の一（第二版と推測されるが詳細未記載）からの訳出。（五）國井哲義による訳で「酒中に真あり」、『原典訳記念版キェルケゴール著作全集第四巻』（創言社、一九九六）所収の「人生行路の諸段階（前半）」

中の一編「デンマーク語の全集（第三版、第七巻）からの訳出。

なお、本文終盤では、右のいずれとも區別して「酒中ニ真理アリ」と表記する場面がある。

⑧ モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」——キルケゴールがヴィクトル・エレミタの偽名で刊行した『あれか、これか』（一八四三）のなかでも存分に論じている——は、たしかに何度となく重要な話題として論じられ、かつ、現に楽曲として奏されてBGM以上のものとして鳴り響く場面さえあるが、堀田が「諒解」したような中心的トピックではない。

⑨ 『追憶の哲理』における副題の表記は、「ウィリアム・アフハムによって語られたる追憶」。そうして追憶を語る主体の地位を与えられている「アフハム」だが、榊田啓三郎（注⑦）に掲出した訳本所収の「愛と死と実存」[訳者あとがきに相当]によればそれ自体、「ドイツ語の von ihm、英語の by him にあたるデンマーク語 af ham を名詞化したもの」すなわち言葉遊びであるし、さらに私には、本文末で「架空の存在」であり続けようとする〈私〉をその副題に記される偽名に直結させる素直さも備わっていない。

⑩ 長谷川評伝は、「私には不可解というほかないような一つの挿話」（二〇八頁）として、吉田健一逝去（一九七七）の報をスペインで聞いた堀田善衛がのちに書いた回想を引用し、それへの批判の言葉を継いでいる（二〇九頁）。それをまず次に並べて引用する堀田の回想はもはや全集に当たって確認せずに済ませる、完全なる孫引きである。

「戦時中のある日、いつの頃であったか、吉田健一氏と話をしていたときのこと、彼が出し抜けに、「堀田君、これでわれわれも植民地をもつことが出来たから、英国人程度の生活ができるようになるね」と言い出し、小生は小生でそんなことは夢にも考えたことがなかったので、愕然としたことがあった」（「オリーブの樹の蔭に」における堀田の回想）。

「不可解」と記したのは、なんの状況説明もなく誤解を招きかねない、揚げ足とりのような挿話を、それこそ「出し抜け」に記す、著者の動機を訝しむからである。あるいは、「日本国の世の中に対する考え方」の「距離」を示すために、誤解を受けさせることが目的であったとするなら、進歩的知識人を仮装しつつつけた文学者の自己肯定の精神を思って、「愕然」

とする」（長谷川評伝の地の文での堀田批判。引用中の傍点は長谷川）。

さて、堀田の回想を当初、「恢復」の残忍な証として読んだ私は、長谷川評伝によるこの堀田批判そしてそれに続く（けれどもここでは省く）吉田健一擁護のいずれをも肯んずればこそ、評伝の約四〇頁後でなされる例の『追憶の哲理』共訳の件への言及の折、やはりもう少し突っ込んだ考察（継続する批判）があっても良かったのに、とあらためて思う者である。

⑪ 宮原晃一郎、「憂愁の哲理」（春秋社、初版＝一九三三）。

⑫ Flemming Fleinert-Jensen, Michel Forget and Jacques Message, "Traduction Française des Textes de Søren Kierkegaard," *Revue de Théologie et de Philosophie*, 3ème série, 145, 3/4, pp. 337-343.

⑬ 実際はしかし、二件のうち一件を入手しさえできれば事実確認的に消去法的にかその一件か他方を底本と推定することは可能だし、幸いにも私は事実確認的にそれを実践できた。ここは注なのだから遠慮なく書き留めておく。それは Félix Alean 社刊の Paul-Henri Tisseau 訳と Edition du Cavalier 社による André Baberon/C. Lund 共訳の二件で、このうち後者を（ここ）に詳述しない事由によって『追憶の哲理』の底本と推定するに至っているのである。

⑭ このキルケゴールが意図した（「のだから」とデンマーク語ができない私は推測するしかない）語呂合わせには、意外にも、注⑦に列挙した他の歴代邦訳中では（二）中澤治樹によるドイツ語からの重訳だけが応えている。底本との細かな照合の作業が発生するので詳細には立ち入らないが、たとえば（四）榊田啓三郎訳ではその前後は、「孤独な人が逃げ出す（ころは、わずか三本の道の出会いにちなんで俗世間と名づけられているではないか」となっていて、「俗世間」の文字に「Trivartiet. 「俗世間的な」とを意味するこの語が「三つの tri道via」というラテン語からきているからである」という注が付いていても何のことかはよくは分からない。ちなみに吉田健一が底本としたはずの仏訳本は、「Et si ce que craint le solitaire recoit son nom de la rencontre de trois routes: trivialité – combine plus trivialité encore doit être la rencontre de huit routes?」と訳したうえで「trivialité」の語に「De l'origine latine trivium: carrefour.」の訳注を付けており、吉田は重訳にあたってこの訳注を本文に織り込む工

夫を凝らしていることが観察できる。

⑮ ヒュームの死後刊行された『自然宗教に関する対話』(一七七九。福鎌／斎藤訳、法政大学出版局、一九七五)において理神論者クレアテスと懐疑論者フィロのどちらが著者自身の見解を代弁するのか、について議論が重ねられてきた(らしい)件にかんする、しよせんは概説知。

⑯ 順に挙げるなら、まずヴィクトル・エレミタが『あれか、これか』(二八四三)の刊行者、またコンスタンティン・コンスタンティウスが『反復』(二八四三)の著者、とされる者と同じ固有名詞を与えられている。固有名詞が同じという点では、『あれか、これか』の一部をなす「誘惑者の日記」の登場人物であるヨハンネスも同様。さらに、固有名詞では同定させえないが「青年」として指示される者が『反復』の主人公としてのその者と同一とされる、という具合で、ゆえに本文中では「三(ないし四)人」の表記を採ったのである。

⑰ <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/4rb/651/651PDF/ueda.pdf> (本文中では「アドルノの」を「基本文献として明記した」と書いたが、じつは

著者校正のタイミングで、その名が一つの注(13)で小さなトピックにまつわって、しかもむしろ否定的に論及されるにすぎない、ということに気づいた。だが、その論考自体、別の論考(「フィガロふたたび」、二〇一四年)を前編「総論」とする続編「各論」として書かれ、その前編こそアドルノを根底的に踏まえているので——続編の注3に前編PDFファイルのURLも掲げながら明記している——、大筋では、当稿本文の記載内容に誤りはない。まさしく追憶にもとづいて書かれたがゆえの、許される不正確と自身で認定し、こうして「注への注」を括弧入りで付すに留めるゆえんである。)

⑱ 本文中に記したシンポジウム(他の登壇者は辻原登、進行役として尾崎真理子)の企画名をそのままタイトルとする記事が、以下に収載されている。『中央公論』、二〇一六年二月号、一五八—一七二頁(引用は一六〇—一六一頁より)。

(本学文学部教授)